

## 彙報

昭和六十年十月十九日、東海大学湘南校舎11号館に於いて、第四会東海大学文明研究会大会と総会とが開催された。総会では、

昭和六十年度の決算と予算案とが承認された。

その他会務報告が行なわれ、文明研究会会員の構成をめぐって活発な討論がかわされた。

### 昭和60年度

#### 文明研究会大会

講演

「比較文明学とトインビー」

聖心女子大学教授 吉沢五郎

研究発表

「『往生要集』とその周辺」

本学大学院生 田崎篤朗

「ピンダロスにおけるヘクローノスの価値」

本学大学院生 中津海理恵

### 昭和60年度

#### 第二回東海大学秀作卒論・修論発表会

卒業論文

「文明の語義と使われ方」

本学日本課程卒業生 古池利昌

「楼蘭—漢代を中心として—」

本学東アジア課程卒業生 田村繁樹

「イランにおけるシーア派12代イマーム Mafdi: の隠れと再来」

本学西アジア課程卒業生 生沢幸枝

「ブルガリア農業の伸展と農工コンプレックス」

本学東欧課程卒業生 倉知徳幸

「貴婦人崇拜と神秘主義」

本学西欧課程卒業生 永井順子

修士論文

「時間とのかかわり」

本学大学院生 浅見 聡

「ヘシオドスの『仕事と日々』の構造と METRON KAIROS の

意識」

本学大学院生 平野陽一

### 昭和60年度

#### 東海大学文明研究会例会

一月例会

「ラクシュミーの住む都」

本学大学院生 八代和雄

「日本における東西二大文化圏とその性格」

本学大学院生 安田衛史

四月例会

「M・フーコーの都市論」

本学大学院生 中川久嗣

五月例会

「ピンドロスの作品にみられる(時間)について」

本学大学院生 中津海理恵

七月例会

「古代エジプトにおける人型コップフィンの発生と変遷」

本学大学院生 大橋ルミ

### 昭和六〇年度

#### 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻修士

#### 論文題目

今井 久 最古式銅鐸について

中野 雅之 最澄に於ける法華経

石原 綱成 アルブレヒト・デューラーのイタリア旅行をめぐ

る一考察

中川 久嗣 フーコーの『言葉と物』に於る表象と言説について

西田 陽子 プラトンの「エロース」と「知」

久野 芳子 浄土真宗に於ける神祇観の展開

吉村 弘 ロラン・バルト、架空なる空間

### 昭和六〇年度 文明学科卒業論文題目

#### 文明日本課程

秋元 令子 『女学雑誌』の恋愛思潮と北村透谷

朝野 博 大正時代における神奈川県の農民騒擾

阿部 一幸 過疎地域とバス交通——山形県西村山郡西川町の

状況——

五十嵐元彰 明治初期における札幌農学校の農学教育

板屋 朋文 蓮如の思想にみる一向一揆

岩崎 有能 ウィリアム・アダムス

上原 淳 徂徠における「道」

浦野 眞澄 間取りの用途と変遷

大木 敦 札幌農学校時代の太田(新渡戸)稲造

大野 昭史 三宅雪嶺の日本人論

大輪 寿勝 龍馬の手紙

奥田 博 近郊住宅都市における人口の老齢化と老人福祉

——町田市を事例として——

小田島里佳 キリシタン宣教師のみた日本女性の風習

片岡 啓美 矢嶋楯子と男女交際論

加藤 敦 『耕稼春秋』にみる肥料とその利用

鎌田 環 斎宮制と大伯皇女

工藤 春仁 青森県五所川原市における出稼ぎの実態

越知 馨 藤田東湖にみる教育観の一考察

五味 司 縄文期の葬制——埋葬規制の問題を中心とし

て——

斉藤 雄二 梓川扇状地左岸における圃場整備と農業の変貌

作元 令二 「花咲翁」説話の祖型に関する一考察

佐藤 庸雄 『信玄家法 上・下』

鈴木 忠弘 新渡戸稲造の修養観

鈴木理美子 戦後日本のファッション史

関根美恵子 日本人のおもしろ味の感覚——江戸川柳による一

考察——

高木 充正 塵芥集の意味するもの

高橋 真司 戦後の川口鋳物業における衰退の構造

高橋 康晴 『葉隠』にみる武士の死生観

武山 直之 烏山用水、北沢用水が流域に与えた影響

田中 伸明 神奈川県西部蜜柑産地の変貌

田保 勝巳 中世茶碗変遷の実証——「茶会記」を中心に——

戸田 明美 利休時代における茶室の棚

中沢 信自 住生活における住居空間の意義

兵藤 厚 現代の羽黒修験道秋の峰

保坂 敏 都市化と幼稚園——甲府市における近年の幼稚園

の立地動向——

松江順一郎 福岡県宮田町における石炭産業の衰退とその影響

丸山 智明 市島家と福島瀧

宮下 博嗣 佐久間象山の海防論

毛利 浩之 内村鑑三の初期の日本人観

百瀬 一男 松本藩の百姓一揆・加助騒動

八木 修 空海の請来品と帰国後の活動

矢作 淳一 東京都内湾における遊船業の実態

山本 純子 近松にみる「ぎり」と「なざけ」

横山 泉美 子供と行事

吉武 憲章 子供生活の変遷——吉井町末石を中心として——

阿久津政徳 近世鬼怒川における河岸の発達——阿久津・板戸

河岸を中心に——

小沢 照人 都市機能の再編——地方中心都市甲府の場合——

神子 正彦 征韓論にみられる西郷思想の一考察

戸沢 康人 札幌農学校と熊本洋学校

山本竜三郎 ラフカディオ・ハーンと音

中 義之 静岡茶業と流通の変貌

三橋 英宣 オートバイの大衆化と横浜市における普及

屋代 貞裕 (第一次)栃木新聞研究——中田良夫の論説を中心

に——

八柳 卓 横光利一の「旅愁」にみるヨーロッパと日本

朝倉 泰史 観世座の成立

阿部 一雄 『続日本紀』の疫病

伊藤 敏彦 工業用水の停滞とその構造——横浜、川崎地域を

事例として——

岩瀬 浩人 高倉徳太郎の教会観

内海 幹子 厄年の研究——男女の比較——

大賀 洋子 南方熊楠、柳田国男の往復書簡における南方の人物像

大胡 茂行 日本人の交際——村落社会の場合——

大野 秀之 三浦半島における後北條氏の軍制

小川 光洋 『教育勸語』について

柁原まゆみ 子どもの生活空間——板橋区向原町の事例研究——

加藤 一郎 「軍人勸諭」の研究

金枝 薫 いきというものは

草 栄樹 河童の魅力

國吉 俊男 福沢諭吉の『脱亞論』

坂本ゆかり 相馬黒光と中村屋

佐々木直人 平安朝の鬼観念

佐藤かおる 天明七年相州津久井県渡辺土平治騒動

島村 朗 日本の伝統的葬儀——岐阜県白川村の葬送儀礼について——

鈴木 奈美 ひなまつり

鈴木 大 福沢諭吉とギョー——『文明論之概略』を中心に——

園部 晴名 上代の漢字利用

竹下 忠慶 信太の森の葛の葉型「狐女房」の話とその伝承

田中慎太郎 生活改善運動における文化住宅の役割

谷口知沙子 高村光太郎に於ける女性観の形成

中村 栄 山東京伝の研究——二作品に見る文学的姿勢の考察——

百武 圭子 オランダ商館を通じた東西交流

深沢 恵介 横浜市における宅地開発と小・中学校建設の動向

星野 浩章 勝海舟と海軍創設

御小柴秀昭 清少納言の生き方

宮下 準一 芥川龍之介の厭世観

恵 直子 山城国一揆

望月 哲也 日蓮と身延山

森岡 信行 若き徳富蘇峰の社会論

矢崎 俊一 山人と山の神——『遠野物語』における山人と山の神信仰との関係——

安原 正樹 新渡戸稲造の勝負観——武士道精神から学びとるもの——

山田 淳一 『教育勸語』と国定修身教科書

横溝 洋一 和泉式部

吉岡 正和 北条執権と承久の乱

渡辺 昌子 徂徠における「天」

椎野富士夫 新渡戸稲造の宗教思想

豊島 洋 庵仏殿釈と仏教

宮代 邦彦 鶴見川と総合治水

原 秀明 ペリー来航と日本

## 文明東アジア課程

- 秋山 真弓 皮黄の成立  
伊澤 義人 陳勝・呉広の乱について  
磯部 隆一 中国自動車産業の諸メーカーとの合弁・技術協力について
- 岩崎 浩成 社会主義国家中国の商品経済における諸問題  
及川多喜子 宋代の主戸客戸制度についての一考察  
荻野小寿江 唐代の女性の化粧について  
小桐 幹男 貨幣と重量単位  
小野 勝巳 漢高祖の白帝の子赤帝の子に斬らるという説話について
- 木全 紀之 劉邦人物論  
古寺 貴栄 伽椰琴の起源  
小林佐知子 「焚書坑儒」に関する一考察  
小林 新吾 呉楚七国の乱について  
五條 雄央 大久保利通の対東アジア政策——征韓論争から江華島事件まで——
- 竹田由美子 ロバート・ハートの中国観——義和団事件を中心として——
- 手塚 保 東三省における反日思想とその運動  
畑野圭一郎 西原借款と日本国内における批判  
原 稔 緑旗連盟と「皇民化」政策
- 飛田真木子 殷王朝の神々「帝」「河」「雷」について  
平野 真樹 宋教仁の中央集権論  
深澤 美光 革命運動流入初期における横浜華僑の動向について
- 星野 寿之 南越国の興亡について  
増田 直樹 日中国交回復を考える  
間野 朋子 辛亥革命前夜における女性解放運動——秋瑾を中心に——  
間宮 晴海 戊戌の政変における西太后の行動基準考察  
宮本 康仁 現代韓国の食生活の変容について——全羅北道の女子高校生四十五人へのアンケート調査を中心に——
- 森岡 克己 江忠源——太平軍との闘いで江忠源が果たした役割——  
山口 昌美 五徳終始説に関する一考察——秦水徳説について——  
山室友里栄 則天武后——その改革に於ける諸家の見解について——
- 吉田 尚子 一八六〇年以降の中国における買辦制度とイギリス貿易の変遷——怡和洋行における唐廷枢の功績から——  
吉田 大輔 袁世凱の帝制失敗についての一考察  
渡部 義春 鄧善の散滅に関する一考察

陳 炎煌 「国共第三次合作」に関する「一国二制度」について  
椿 晴充 朝鮮人強制連行の実態——伊豆白川地区の鉱山労働——

小河原大成 趙明河事件とその影響

野村可能子 アメリカ留学制度の終局における一試論——容閔

の誤算——

平出 照之 「男装の麗人」川島芳子の思想と行動について

伊藤 正俊 康有為の変法意識とその矛盾について

小野 哲治 アヘン戦争と林則徐のアヘン厳禁論

仲宗根卓哉 内的要因による秦の滅亡

永富 夏樹 王莽の革命についての一考察

山本 徹 明末織備の変についての一考察——その暴動の主

体的側面を中心として——

### 文明南アジア課程

青木 静江 タントラ仏教における世界観と解脱

岡本 吉秋 印対立からインド外交におけるインドの政治情勢

勢

川路さつき インドにおける理想的女性像——肉体的側面から

の考察——

古崎 真 死の儀式と不浄観念

佐藤友吏子 インドにおける観世音菩薩の成立及び特性と変化

観音への転化

椎名 知恵 アノマン

鈴木 享子 ガンデーの健康論

橘 致隆 一九世紀以降のイギリス植民地政策とインドの民族運動について——ヒンドゥーとムスリムを中心

に——

田中 直子 ピンダリー

中野 真実 ガンデーにおける両性具有性についての考察

長竿由紀子 「サテイー」廃止令——歴史的背景とその意義——

西山 直木 ストゥーパ・その起源と変遷

二瓶 三枝 現代インド社会における指定カーストに対する残虐行為

花井 智 パンジャーブ紛争について

明 由里 インド更紗——その多様な模様染めについて——

村田 雪絵 日本の東亜政策とインド国民軍

望月みどり 英印円卓会議にみるガンデーとアンベードカル

——不可触民問題をめぐっての建前と本音——

山田 里美 アラー・ウッディーン・ハルジー——その人物像——

山仲 昭徳

近代、及び現代初期にみられるヒンドゥー教徒の女性観

米沢 龍子 初期仏教における慈悲とその実践

小島 昇一 ヒンドゥー・タントラと仏教タントラ

鷲尾 浩樹 インドにおける牛崇拜

## 文明西アジア課程

青木真知子 古代エジプト女性の地位

荒井久美乃 一六世紀の海洋案内書「キターブ・バフリエ」について

入江 菜穂 一六世紀の書 *Mecmû-1 Menzail* に関する一考察

察

大熊 照美 サマーにおける音楽と恍惚について

笠原 正嗣 白色革命について

春日美千代 ハトシエプスト即位に関する一考察

門倉 敦子 サードクルヘダーヤトの世界観——『盲目の鼻』の思想

金井 慎一 オスマン帝国とハンガリー——スレイマン一世の時代を中心として——

清原 工 *Rabi'ah al-'Adwiyah* に於ける *mahabbah* と *Bhagabadiya* に於ける *bhakti* の概念の類似性について

齋木 直子 ジャワ文化圏におけるイスラームの普遍的純化を阻む要因——Geertz 著『The Religion of Java』にみるサントリとアバングンに関する一考察

杉野 淳 八世紀～一世紀のイスラーム圏における金融形態

高原 清子 イラン・イスラム革命の展開と女性運動

玉川 司 一九六〇年の革命とトルコ国軍  
塚田ゆかり オスマン帝国の外務機関とセリム三世とマフムト二世の改革を中心に、外務省の前身からその統合まで

まで

長田 尚代 「一五世紀後半のイスタンブルのユダヤ教徒」

二宮 秀嶋 中世におけるインド洋貿易の実態について

本所 直子 ゲニザ文書に見る一〇～一三世紀の地中海世界

松本 英輔 'Ahmad Ghazali' の *sama'* の概念について

柳川 利香 アッバース朝革命について

片岡 秀美 ブズカシ (BUZKASHI)

川端 一寛 'Abdal-Jabbar' の知識論

澤田 泰成 「ファイサル王と開発五カ年計画」

森田 行雄 一九五五年と五六年におけるエジプトとソビエトの外交関係

## 文明東ヨーロッパ課程

大崎 賢司 オスマン支配下のバルカン諸国——特にブルガリアを中心として——

大森 厚子 日本語とセルビア・クロアチア語の動詞の対照研究——料理動詞の分析——

岡崎 敏郎 五世紀におけるキリスト論論争——特にネストリオス問題について——

恩田 健一 スターリン主義下におけるソ連の対独関係（西側

諸国を背景として)

勝部奈奈子

ユーゴスラヴィア、ソビエトの教育制度と日本の教育制度の比較——教育問題について——

鹿股 秀隆

九世紀・一〇世紀におけるブルガリアの外交政策について

桑原 孝栄

ゴリキキーと下層市民

小橋 永子

セルビア英雄叙事詩に於ける英雄像——クラリェヴィチ・マルコ——

斉藤珠里香

カルシュテイン城における歴史的背景とその建築様式について

佐々木 達

血の日曜日事件におけるガボン  
祖国戦線にみるブルガリア社会主義への道

篠原 一成

デカブリストの発生とその原因について  
ブルガリアにおけるスタンボリスキ政権とその影響

鈴木 健司

シヨパン音楽の特質と民族性について

高田 淳

ソビエト市民の権利——選挙と情報——  
日本とロシアの民話の比較(浦島伝説について)

高村 佳子

セルビア英雄叙事詩に於ける女性像について  
イヴァン雷帝の恐怖政治について——特にオブリチニナについて——

武川佐和子

玉谷はるみ  
ノーメンクラトゥラとその発生について

寺田誠一郎

中ソの対立(一九四九年—一九六三年)

並木 邦枝

ハンガリーにおける第二次世界大戦後の政治と市民生活の変化

納村 聡子

中世ロシアの写本『キエフ詩篇』  
甫足 孝一  
チェーホフの生涯における「文学」と「医学」の関係

堀口まり子

ユーゴスラヴィアと日本の交友関係について——  
姉妹都市交流をめぐって——

三浦 正仁

ベチョーリン、及び《現代の主人公》の肖像

安塚 浩一

ハンガリー動乱について  
八巻 孝夫  
日ソ貿易

山下 謙次

チトーVSスターリンワレサVSポーランド政府  
四方田宏美  
ポリス一世のキリスト教受容をめぐって

須田 義己

バルチザン闘争に於けるチトー

富士 久義

女帝エカテリーナ二世——ポーランド分割と国内政策を通して——

藤崎 真人

エカテリーナ二世の政治政策——ポーランド民族を通して——

野村 秀雄

東欧と西欧の比較対象文明論——歴史的側面からの考察——

渡辺 由佳

スキタイ民族に関する一考察

### 文明西ヨーロッパ課程

有原 知江

ギリシア神話における神助と神罰——ホメーロス

を中心として——

伊藤 昌晃 緑茶と紅茶——「茶の文化」を考える——

犬飼 敦子 サド侯爵その自由主義について

入江 桂子 ケルト人ヨーロッパにおけるその足跡

上向井明日夫 共通農業政策におけるヨーロッパ統合

角田 忠明 レオナルド・ダ・ヴィンチの女性観——中世の女性観との比較——

加藤 浩樹 エロティシズム——禁止と猥褻について——

金子みゆき 日本ブームと西洋化

河原塚光枝 十八世紀フランスの民衆——パリ庶民の生活——

北見 陸 カフカにおける孤独と戦い

君塚 明 ライン文明論——ライン水系と他の国際河川との比較——

熊井 三佳 「文明」の今日的意味

小長谷 聡 森林はよびかける——人間と森林——

小松 敬明 文明史における辺境論周辺型文明としての日本

後藤 章宏 ロックにおけるレコード・ジャケット文化論——今、レコード・ジャケットが面白い——

坂井百合代 ヘンオドス『神統記』にみられる宇宙観——古代東方神話との比較において——

佐渡谷博美 ホメロスにおける神と人間

重村 香里 初期キリスト教徒迫害をめぐるローマ帝国の法原則の確立

清水 喜弘 十字軍時代の文化について——十字軍と集中式城郭——

菅原 厚志 ヨーロッパ戦争史とナポレオン戦争

鈴木 路晴 アイルランド人——ケルトの証人達——

高橋千穂子 中世ヨーロッパにおけるベスト禍

田島 寿乃 トマス・アクィナスの美学

田中 孝将 光と影の媚薬——幻覚剤について——

谷 泰彦 ラグビーからアメリカンフットボールの発達と比較

外山美穂子 母マリアにおける「処女懐妊」——カトリック派の「母マリアの処女懐妊をテーマとして」——

中村 靖弘 クルマの持つ魅力の文明論

長田 昇 港と海と人類と——東京湾のこれからの発展とその役割——

西崎 雅美 「悲劇の王妃マリーアントワネット」についての試論

浜谷 麻美 近未来の考察——エレクトロニクスと高度情報化社会における若者の意識——

平田 隆哉 日系アメリカ人の順応性——今後の対米進出企業のあり方——

藤長みどり 十九世紀英国のパブリックスクール——『トムブライウンの学校生活』を資料として——

星野 新一 リンカーンの人間観

前島 稔樹 神話から見た神々および宇宙の誕生——ギリシア

神話と日本神話の比較——

森谷 智道 二・四グラムの世界——卓球におけるアジアとヨーロッパの比較——

ヨーロッパの比較——

山崎智重美 離婚現象からみたアメリカ社会とその文明

横山真由美 ヴァイマル時代における歓楽都市ベルリン

渡辺 康彦 ビューリタン革命の独裁者クロムウェルについて

石毛与志彦 宗教学的墮落論

高岡 祐治 ホップス『国家論』の思想がもたらす現代社会への危機とその一考察

矢崎 茂 キルケゴール『誘惑者の日記』について

永田 将 スターリンについて

森松 稔 時代の変遷——ビートルズとマイケル・ジャクソンをめぐって——

横溝 彰 戦後西ドイツの個人主義の変遷について

有村 健 グリム童話の背景

稲葉 嘉広 コットンクラブと禁酒法時代に生きた人々

今井信一郎 薔薇十字団について

上里 貴子 新たな生と死——脳死と心臓移植——

太田 裕美 都市空間における水——水の歴史的概念の考察をもとにして——

沖土居真子 ゲルマン系ヨーロッパと日本の自然 風土 文化

落合 良枝 日本とヨーロッパの比較にみる自然に対する意識

の違い

片桐 正人 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』——ベンジャミン・フランクリンにおける

一考察——

金子 俊哉 トイレと文明

川田 成徳 リヒャルト・ワーグナーに託つての愛と世界像

——『ニーベルンゲンの指輪』の象徴的意味をめぐって——

河村真由美 欧米文化との比較における日本文化の特質

北村 陽子 サン・ドニ修道院長シジュエールにおけるゴシック建築の理念

工藤 玲子 エリザベス一世とイギリス史におけるその役割

河野 実 鯨と人間との対話

小林 久織 近世フランスと近世日本における刑法と慣習

斉藤太嘉志 アメリカン・トラディションナルとしての「アイビー」を考える

桜田 直記 アレイスター・クロウリーの魔術

須賀 淳 西ドイツにおけるマイスター制の意義とそこに内在する職業意識——その重要性和脆弱性——

杉浦 直美 マキャベリの『君主論』におけるチェザレ・ボルジア像

瀬崎 英一 西暦二〇〇〇年の余暇——余暇の時代の到来とその対応——

の対応——

の対応——

の対応——

の対応——

の対応——

の対応——

の対応——

竹内小百合 トリュフォー論

多田 明広 ジャンヌダルクの神話

田中真理子 フランス革命以後二十世紀にいたるファッションの構造

富田 珠里 あなたはアリスを演じられますか

仲山 康郎 エーリッヒ・フロムの思想とその批判

橋本 美幸 フロイトのエクスタシー

原崎 寿雄 魔女裁判

船越 秀幸 職業力士の変遷——英雄と見世物の狭間で——

細金 薫 近世フランスにおける女性と子供

松橋 昭彦 ボス BOCHE

宮園 俊一 十字架について——その歴史と意義——

矢ヶ崎康子 集団への逃避——ペストとAIDSを例に——

吉田 克美 同時代に生きた人から観たナポレオン——ジョセ

フィーヌから観たナポレオンを中心に——

小倉 通孝 忌避の理念を持つアーミッシュ

永田 正人 ボードルールと現代文明